

戦争を体験した者にとって戦後などないのです

—— 自分史における「戦争体験の継承」に関する一考察 ——

釋 七月子

はじめに

本稿は、自分史研究の視点から、自分史の一つのジャンルである戦争体験を取り上げた
いと考える。

自分史を考える際、戦争体験というものを避けては通れない。自分史を書く人は、60 歳代、70 歳代を中心にした高齢者層に多く、特に 70 歳代以降のほとんどが幼少期から青年期にかけて直接戦争を体験している。それ故、戦争にまつわる記述が目につくのも当然のことである。

本稿で取り上げる鈴木政子も戦争を体験した世代の一人である。自分史は素人の作品のため、一人の著者が書く作品の数は少ない。さらにほとんどが自費出版のため、入手が困難な場合も多い。鈴木政子は自分史の講師であるとともに、「ふだん記」の出身という経歴を持っている。グループ誌（『ちがさきふだんぎ』）以外に商業出版も数冊あり、比較的作品を入手しやすい。また鈴木は満州からの引き揚げ者であり、戦争体験を語り継ぐことに大きな意味を見出している。

本稿では、悲惨な引き揚げ体験を有する鈴木政子の目を通した戦争の語りを考察する。具体的には鈴木の世界群を見ていくことにより、鈴木の中での戦争に対する考え方の変遷、戦争体験の継承をライフワークと考えるに至った過程を明らかにしたい。そのことは、「無名の庶民、無名の個人」が自分の体験した戦争を後世にどのように継承していこうとしているのかを紐解く一助になるのではないかと考えるからである。

鈴木政子についての先行研究は、小林多寿子『物語られる「人生」自分史を書くということ』（学陽書房、1997）と塚田守『「戦争体験」の語り継ぎ——自分史作品の分析から』（椋山女学園大学研究論文集第 40 号（社会科学篇）2009）とがあげられる。

まず小林の研究であるが、小林は自分史を 5 つのタイプに分けており、そのなかの一つ「ともに書く自分史」を実践する人物として鈴木政子を取り上げている。鈴木が「ふだん記」運動の流れを組んでいることや、鈴木のみまわりにできている「自分史コミュニティ」に注目している。鈴木の世界群としては、『あの日夕焼け——母さんの太平洋戦争——』（立風書房、1980 年→ 彩図社、平成 12（2000）年、以下『あの日夕焼け』と記す）と『満州そして私の無言の旅』（立風書房、1987 年）の 2 冊を取り上げて、前者は鈴木の世界群にとって、もっとも重要なターニングポイントの一つであったとし、後者は歴史の学び直しによって、新しい展開を切り開いた 1 冊と述べている。

塚田は「10 歳代で何らかの『戦争体験』を持ったものは、その影響を人生の後まで受ける傾向がある」とし、「その人たちが自分史の中で語る『戦争体験』を分析し、今後も『戦争体験』が語り継がれる意味について考察」している。3 人の戦争体験者を対象にしてい

るが、引き揚げ体験の例として鈴木を分析している。小林同様、『あの日夕焼け』『満州そして私の無言の旅』の2作品を取り上げ、鈴木が戦争体験を語るに至った過程を整理している。

小林の『物語られる「人生」自分史を書くということ』が書かれた時点では、2008年に単行本になった鈴木著『わたしの赤ちゃん』（学習研究社、2008年）は、まだ出版されていなかった。一方塚田は、『わたしの赤ちゃん』については全く言及していない。しかし鈴木自身が述べているように、『わたしの赤ちゃん』は「今まで書いた旧満州での体験の集大成をしよう、と筆を執った」¹ 作品であり、この作品も合わせて考えねば鈴木の戦争に対する思いを語ることができないと考える。

戦争観の変容に関する先行研究は吉田裕『日本人の戦争観』（岩波書店、1995年）が挙げられる。1970年代は庶民の戦争体験の記録化が大きく進む時期であり、多くの国民が自己の戦争体験と向き合うことにより、戦争の時代の生活史に新しい光があてられた時期だとする。また1980年代に入ると、戦争体験の語りの質が今までの語りとは異なってくることを指摘している。この時期には、戦争の侵略性や加害性から目を背けず、日本軍の犯した残虐行為の証言も行われるようになる。またアジア諸国との改善、あるいは日本がアジア地域でより大きな政治的リーダーシップを発揮するためには、戦後処理の問題や戦争観のズレの問題が重要なポイントになってくるという現実的な認識が生まれた時期であることも指摘している。

戦争の体験の語りを「体験」「証言」「記憶」という3つの時代に分け、「戦争経験」を手がかりにした戦後史の記述を試みたのは成田龍一『「戦争経験」の戦後史——語られた体験／証言／記憶』（岩波書店、2010年）である。1960年代半ばから1980年代にかけての「証言」の時代の語りは、ベトナム戦争の影響も受け、加害者としての戦争認識が登場する。また戦時中「少国民」であった人々の証言や「引揚げ」「抑留」に関する新たな証言も語られはじめるという。「証言」の時代の語りは経験を共有する人々に対して語るのではなく、戦争経験の共有がない「戦後」世代に向けての語りである。それゆえ「事実」の認定という要因が入り込み、その虚実をめぐっての議論に発展してしまうことを指摘している。

鈴木作品は、『わたしの赤ちゃん』を除き、1970年代から1980年代にかけて書かれている。その間3作品を発表しているが、鈴木は発表された作品に対する読者の批判を受け止めて学習をし、その上で次の作品を書くという作業を行っている。つまり、鈴木作品は、1970年代、1980年代の戦争観が反映されていると考えられる。本稿では、吉田、成田の研究成果を鈴木作品の時代背景として意識しながら進めていきたいと考える。

自分史は、1980年代後半からのブームを経て定着し、今ではある程度社会的に認知されていると考えられる。しかし自分史の詳細を知る人はまだまだ少ないのではないかと本論に入る前に、自分史の概略を述べることにする。²

今日では歴史学者・色川大吉が自分史の提唱者であるとされている。「無名の庶民、無名の個人が、昭和の全体像の中でどのように生きてきたのか」を表記することで昭和全体史を書こうという趣旨でまとめられたのが、昭和50（1975）年に出版された『ある昭和史 自分史の試み』（中央公論社）である。そのとき初めて「自分史」という言葉が使

われた。「自分史」という概念は、色川が独自に作り出したものではない。その源流にまでさかのぼっていくと、「ありのままに書く」ことを重視した戦前の生活綴方まで行き着くと考えられる。本稿は自分史の源流を探ることをその趣旨としていないので、ここでは触れないが、自分史誕生の直接の源は「ふだん記」である。

八王子在住で、地方文化研究、婦人回覧誌の編集などをしていた橋本義夫によって、庶民の文章運動である「ふだん記」運動が始められた。識字率が高く文章を書く力もあり、人生経験も豊富であるにもかかわらず、一般庶民は文章を書こうとはしないという現実直面した橋本は、その理由を庶民の中に何か劣等感のようなものがあり、社会からも目に見えない締め付けがあるためではないか、と考えた。それらを取り除き、できるだけたくさんの人に自由に文章を書いてもらう運動、それが「ふだん記」運動であった。戦前の生活綴方運動の系譜上にある、大人のための生活綴方運動の一形態と考えられる。

昭和 33 (1958) 年、橋本は、日頃世の中の表舞台に立つことのない普通の人たちがふだん着で集まり、皆でお喋りしたり、書いたりするという庶民の文章運動を始めたが、橋本の意図は達成されず、10 年ほどで失敗に終わった。しかし昭和 42 (1967) 年の暮れ、四宮さつきらの呼びかけにより文章運動を再開し、昭和 43 (1968) 年 1 月、「ふだん記」第 1 号が刊行された。最初は 10 人から 20 人のグループであったが、オイルショックにより世の中の考え方が一変し、人々の関心が心の充実に移ってきたことが後押しとなり、各地域に支部のようなものができるまでに全国的広がりを見せた。

橋本は各自が書いた文章を本にすることを勧めた。「ふだん記」というコミュニティがあるので、お互いに本を買い合って支え合うことができ、また自分の書いたものを読んでくれる「読者」を常に獲得できるというのは、この運動の大きな特徴である。「ふだん記」の中には、個人史・ライフヒストリーなどもあり、それらの記述の中で、歴史との接点を見いだせる作品も何点か存在した。歴史家である色川大吉は、それらの作品に注目した。色川が民衆史として理論化した概念と結びついたとき、一次はブームとまで言われ現在も書き続けられている「自分史」が誕生したのである。

「ふだん記」運動の一環として書かれた自分史は、1980 年代半ばに到るとその様相を大きく転換する。ワープロの登場や出版システム、自分史の支援サービスが確立されたからである。その結果、自分史は大衆的広がりを見せた。現在では、比較的安価に自費出版ができるようになっている。また地方自治体やカルチャーセンターが開催する自分史教室も充実しているし、自分史の書き方本も多数出版されている。自分史を書くことは、もはや特別のことではなくなった。人生経験の豊かな高齢者が、自分の人生を振り返るために、あるいは後世に語り継ぐために、自分史を書き始めたのである。

1、鈴木政子のプロフィール

前章で「ふだん記」運動について触れたが、鈴木の前歴として押さえておく必要はないのは、鈴木も「ふだん記」の出身者ということである。鈴木は橋本の「ふだんぎでつきあい、ふだんぎで話し、下手でもいい、ふだんぎで文章を書きましょう」という文章に感動し、橋本の元を訪れる。橋本義夫と会ったときの気持ちを「情熱と知識と行動力を持

ち、宇宙的感觉で物を観る人だなあ、すばらしい指導者に会えたとか心がたかぶった。」と書いている。鈴木は他の「ふだん記」会員とともに昭和 52 (1977) 年 12 月に「ふだん記茅ヶ崎グループ」³ を作り、文集を発行するようになる。鈴木は橋本義夫について、次のようにも語っている。「この時期 (1980 年代前半) (筆者註)、橋本氏の存在は、わたしにとって絶対的なものであった。」「偉大な人であった。もし彼と出会わなかったら、わたしは生涯、文章を書かなかっただろう。橋本氏は、広い苗床に、鈴木政子を 1 本の苗として植え付けてくださったのだ。」後に鈴木は「ふだん記」を去ることになるが、橋本への尊敬の念は消えることはない。鈴木は若い頃、ある雑誌に作品を投稿したのだが、「文学性がない」という批評を受け、筆を折った。それから 18 年後、橋本義夫という指導者との出会いが鈴木に再びペンを握らせたのである。鈴木の文筆活動の原点は「ふだん記」であり、橋本義夫という指導者への「個人崇拜」であった。⁴

次に鈴木政子のプロフィールを簡単に紹介する。⁵

鈴木は昭和 9 (1934) 年 10 月、福島県喜多方町に生まれる。両親は教員で、昭和 14 (1939) 年 9 月に父親 (小学校教員) の転勤により奉天に移転する。昭和 20 (1945) 年 8 月、鈴木 10 歳のときに満州で敗戦をむかえる。ソ連兵を先頭とした暴徒に襲われ、その後大虎山収容所で 57 日間の収容所生活を余儀なくされる。そこで、弟 (3 ヶ月) と妹 (3 歳) を亡くしてしまう。昭和 20 (1945) 年 10 月、無事錦州へ脱出することができたが、さらに過酷な生活は続く。父親が収容所の所長になったため、若干 10 歳の鈴木が煙草などを売って生活費を稼がねばならず、夜は入院中の弟の病院に泊まる母の代わりに、小さな妹の面倒を見なくてはならなかった。ここでも弟 (7 歳) と妹 (1 歳) が亡くなっている。この悲惨な体験が、鈴木の自分史の原点なのである。長く苦しい収容所生活の後、昭和 21 (1946) 年 5 月、帰国のために錦州を出発し、同年 5 月 17 日、博多に上陸することができた。

帰国後、鈴木政子一家は長男だった父親の喜多方の実家に身を寄せる。母親は長男の嫁として舅に仕えたが、無一文で帰ってきた嫁に対して舅は辛く当たった。家庭内のごたごたに嫌気が指した鈴木は、昭和 58 (1953) 年 4 月に実践女子大学入学のため上京して以来、家には寄りつこうとはしなかった。

昭和 32 (1957) 年から 2 年間株式会社学習研究社に勤務するが、神経症を患い喜多方に戻り入院する。昭和 34 (1959) 年 6 月から、日本電気株式会社の舎監兼教師の職に就く。昭和 37 (1962) 年に一流企業に勤めている男性と見合いし婚約するが、その婚約者に別の恋人がいることが発覚する。婚約者とすでに肉体関係があった鈴木は、それが原因で自殺未遂をしてしまう。その後上京し、歴史学関係の事務局で編集関係の仕事に就く。その間自殺未遂で傷ついた鈴木を支えてくれた鈴木氏と昭和 38 (1963) 年に結婚し 2 人の息子に恵まれる。しかし子供たちの病気のため 9 年間勤めた事務所を退社し、フリーで校正の仕事始める。その後昭和 46 (1971) 年、夫とともに茅ヶ崎に書店を開業する。現在は文章教室・自分史講師、フリーライターとして活躍している。

鈴木は6冊の本を出版している。自分史作品は『あの日夕焼け』、『満州そして私の無言の旅』、『「舎監せんせい」——集団就職の子どもたちと共に——』（新風舎、2000年、以下『「舎監せんせい」』と記す、平成11（1999）年出版フォーラム・自分史コンテスト最優秀賞受賞）、『わたしの赤ちゃん』（第18回北九州市自分史文学賞大賞受賞）の4冊である。文章や自分史の書き方本は、『文集づくり本づくり』（日本エディタースクール出版部、1984年）、『自分史』（日本エディタースクール出版部、1986年）の2冊がある。他には平成12（2000）年、実践・研究レポート「書くこと」の道程(みちのり)から——自分史学習を中心として——を財団法人日本女子社会教育会『女性の学習の歩み』に投稿し佳作となっている。

本稿の趣旨は「鈴木の中での戦争に対する考え方の変遷」と「戦争体験の継承をライフワークと考えるに至った過程」を明らかにすることにあるので、前述の自分史作品4冊とふだん記時代のグループ誌『ちがさきふだんぎ』に掲載された作品を中心に考察する。

ここで、鈴木が戦争体験を書き始めた契機とそれぞれの作品が書かれていく動機を確認したい。

鈴木は学生時代に、自分の満州引き揚げの体験を「空気さん、あの海を越えて行って」という題名で童話風につづっていた。後にその作品が、長男（当時小学校4年生＝昭和39（1964）年）のクラスで読まれることになる。「戦争ってかっこいい」ものだと思っていた子供たちには、かなりの驚きだったらしく、『戦争って』という感想文集が作られた。子供たちの感想文に励まされた鈴木は、戦争を語り継ぐことの責務を痛感し、それ以後、戦争体験を書きつづるようになる。そのときの作品は、昭和53（1978）年3月に発行された『ちがさきふだんぎ』第2号に「戦争ってかっこいいもんじゃないんだよ」という題名で載せられている。

鈴木は『ある昭和史 自分史の試み』を読み、橋本義夫が主宰するふだん記運動の存在を知る。その後仲間5人とともに「ふだん記茅ヶ崎グループ」を設立する。ふだん記運動に関わりながら、戦争体験を一冊の本にまとめるための執筆を始める。大学教授の話を聞くことにより、「書くことは自分を確認することであり、自己改革につながるということ。自分史を書くことは、底辺の庶民から郷土史、日本史、世界史、人類史までつながるのだ。」という論理を習得する。さらに、沖縄旅行（^{まぶにが}摩文仁丘）に行ったことが、以後戦争体験を書きつづる決定的な契機となっている。東シナ海を見ながら、この海の先に中国があるのだと思ったとき、「中国で亡くなった人たち、弟も妹もいっしょになって、波に乗ってわたしの方に駆け寄って来る」という異常な体験をする。このことが鈴木に、「あの「わたしの戦争」を書かなければ、死んでも死にきれない」という決意をさせるのである。沖縄旅行から3年後、今度は広島に旅をする。広島平和記念資料館を訪れたことにより、戦争体験を語り継ぐことへの決意をより強く持つことになる。鈴木45歳のとき、『あの日夕焼け』という本を商業出版する。反響があり、いろいろな感想が寄せられたのだが、その中に「加害者である日本人の姿勢が描かれていない」「どうして戦争になったのかを解明していない」などの批判があった。鈴木は自分の勉強不足を反省し、「茅ヶ崎常民学舎」という歴史を学ぶ学習グループを立ち上げて政治思想史をバックに近・現代史を10年計画で学び始める。その成果を踏まえて書かれたのが鈴木の水文字通りの自分史『満州そして私の無言の旅』で

ある。この本の中で初めて、「女性の戦争被害（ソ連兵や中国兵による強姦、墮胎等）」に言及している。そして鈴木が70歳代に入ったとき、「どうしても書かずに死ぬことができない。闇に葬ってはならない。」⁶という強い決意のもとに「今まで書いた旧満州での体験の集大成」として『わたしの赤ちゃん』を執筆したのである。

2、「戦争体験の継承」に対する意識の変化

鈴木は昭和24（1949）年に中学校弁論大会で中国の体験を語って優勝するが、その後、中国の引き揚げ体験に関しては公に語ることはなかった。とは言え、鈴木が舎監をしていた昭和35（1960）年頃から、「敗戦記念日」の8月15日に、100人ぐらいの若い寮生たちを対象に毎年引き揚げ体験を話していた。

息子が小学校4年生のとき、「おかあさんは、ぼくぐらいの時、どこにいたの？ なんていう小学校にいていたの？」と聞いてきたことが契機となり、「せめて息子たちに母親の自分史として、あのときのことを話しておかなければ」と思うようになる。学生時代に書いた「空気さん、あの海を越えて行って」という作品を出してくるのだが、そのとき、「せめてクラスの子供たちにもいっしょに聞いてもらいたい」という気持ちになる。息子の担任にその作品を渡すことによりクラスの子供たちが読むこととなる。鈴木の子供たちに対する子どもたちの感想が『特集 戦争ってなんだろう ― 私たちの考えたこと』という文集になり鈴木に手渡される。自分の体験が、子どもたちが抱いている「戦争ってかっこいい」という思いに少しは問いかけができた、という自信が鈴木に芽生えた。

前述したが、ちょうどこの頃、鈴木は橋本義夫のふだん記に加わり、「ふだん記茅ヶ崎グループ」を創設する。昭和52（1977）年にグループ誌の創刊号を発行しているが、その翌年の第2号（1978年3月）に鈴木は「戦争ってかっこいいものではないんだよ」という作品を載せている。その中に次のような箇所がある。

知らぬ間の加担者であった我々の責任と義務として、お母さんの口から、おとうさんの口から、まず身近なものから子供に話し継がなければならなかったのです。風化してしまうものではないのです。「かっこいいもの」として美化され、あこがれとなってしまっはいけないのです。

中学のとき以来、口を閉ざしていた鈴木が、ここに来て戦争体験を語り継ぐ重要性に気付く。戦争を知らない世代になったとき、戦争が風化することや美化されることへの危機を感じたからである。

『ちがさきふだんぎ』第5号（1978年12月）には「お母さんへ ―娘より―」と題した母への手紙の形式を取った作品を載せている。この作品は、「中国で亡くなった人たち、弟も妹もいっしょになって、波に乗ってわたしの方に駆け寄って来る」という奇怪な体験をした沖縄・摩文仁丘の旅行から帰ってきた後に書かれている。

でも私は今年になって変った自分を見出し、おどろいているのです。積極的に「あの戦争（私の場合の戦争）」を子供たちに語り継ごうと呼びかけられる自分に変身したの

を不思議に思っているのです。

お母さん、泣いてもいい、泣きながらでもいい、あの体験を一人でも多くの人に話していきましょうね。

最後の一文「お母さん、泣いてもいい、泣きながらでもいい、あの体験を一人でも多くの人に話していきましょうね。」に、戦争体験を語り続けることへの強い意志が読み取れる。摩文仁丘での体験が鈴木に与えた影響の大きさがうかがえる。

しかし翌年・昭和 54（1979）年の第 8 号掲載の「しみじみと」では、戦争体験を語ることのつらさ、苦しい心の内が述べられている。

あの当時のことは、思い出すのもいやなのです。心の傷をかきむしるようでいやなことなのです。(中略)でもやっぱり、私は多くの人に読んでもらいたいと思ったのです。

この頃の鈴木は、語ることの重要さを認識しつつも、その苦しさに胸が締め付けられる思いに耐えていたのであろう。揺れ動く心が素直に記されている。

しかし 2 年後の昭和 56（1981）年、第 12 号（1981 年 7 月）に投稿した「「ひろしま」を尋ねて」を読むと、今までの迷いが吹っ切れたことが分かる。鈴木にとって広島は「どうしても訪れなければならない「ところ」」だった。資料館に展示されている物や市民が描いた原爆の絵を実際に見て深い感銘を受け、また対話ノートを読んで心を打たれた。そして鈴木自身もノートに気持ちを書いたのである。

もう絶対に戦争をしてはならない。戦争へと進む道をどうにかして阻む努力をしなければと思いました。そのためには人生の半ばすぎまで生きてきた私は命をかけてもいいと思ったほどです。亡くなられた方々のご冥福を祈ると共に、この方々の犠牲の上に、この平和があること、私共も生きていられることに心から感謝いたします。

(中略)戦争は多くの人々の心と魂を葬り、傷つけました。この戦争の事実を次代の人に伝えなければと思います。全部とは言えないまでも伝わります。語り継いでいきましょう。(後略)

戦争体験継承への強い意志が感じられる。おそらくこのとき、戦争体験継承をライフワークとする決意をしたのであろう。鈴木は広島の旅を「深くて重い旅でした」と書いている。沖縄・摩文仁丘と広島平和記念資料館、この 2 つの旅は鈴木を更なる高見に連れて行ったと言えよう。「まばゆく光る青い海」を摩文仁丘から見ながら、「あの時の『私の戦争』」を書いておかなければ、死んでも死にきれない。わたし自身のために書かなければ。あの人たちの魂にこたえるためにも——」⁷と決心した鈴木。それでもまだ戦争体験を語ることに躊躇を覚えていた鈴木の背中を後押ししたのは、広島の被爆者の見えざる手だったのである。鈴木が戦争体験をライフワークに選ぶ大きな転機は、沖縄・摩文仁丘と広島の旅だったといえよう。

昭和 62（1987）年に書かれた『満州そして私の無言の旅』になると、「あの時のこと」

である戦争が昔話になってはいけないのであり、あくまでも「今の問題」でなくてはならないと考えるようになる。そして鈴木は次のように述べている。

戦争を体験した者にとって戦後などないのです。(中略) 人間が人間でなくなる、どんな無理も通る、そんな戦争の姿を、次代の人たちに伝える役割が、生かされたわたしたちにはあると思うのです。(232 頁)

ここに至り、鈴木は戦争体験継承を自分に課せられた義務のように受け止めている。「戦争を体験した者にとって戦後などない」という強い言葉から、鈴木の決意が読み取れる。

3、「被害者意識」から「加害者意識」への変化

『ちがさきふだんぎ』第2号に掲載した「戦争ってかっこいいもんじゃないんだよ」は、鈴木政子が大学生のときに書いた作品「空気さん、あの海を越えて行って」と内容はほぼ同じだと考えられる。小学校4年生の頃の戦争体験を約10年後に書いたことになる。この作品について鈴木自身、次のように書いている。

文章もほんとうにつたないし、「どうして戦争を起こしたのか」という問題には、やはりはっきりとした解決が出来ていません。しかし今、これを書けといわれてもかけるものではない、ただ「ほんとうにあったこと」として事実を知ってもらいたいだけの気持ちです。⁸

自分史は今の自分の視点から過去を語る形になる。いくらあの頃のあのときに回帰して書いたとしても、やはり「今、ここ」における自分自身の考え方が支配的になる。たった十数年後に書いた鈴木戦争体験は、他の作品と比べて当時の気持ちや考えに一番近いところにあることは確かである。「今、これを書けと言われても書けるものではない」という鈴木言葉がそれを物語っている。おそらく学習や他の客観的資料とのすりあわせもあまりせず、自分の当時の思いを書きつづったのがこの作品であったのだろう。そこでまず、「戦争ってかっこいいもんじゃないんだよ」の中に出て来る戦争に対する鈴木の気持ちを見ていくことにする。

筆舌に尽くしがたい苦労を経験した鈴木も、やっと日本に引き揚げることができた。その引き揚げ船の中で、兄のような年頃の船員と親しくなり、満州での戦争体験を話す場面が最後に書かれている。その部分の一部を引用する。

「ロスケにお友達を何人も殺されたからって、だけどなあ、まさちゃん、ロシヤ人ばかりが悪いんじゃないんだよ。(中略) これだって誰が悪いと言うんじゃない、戦争のおかげなのだ。戦争なんかしあった者が悪いんだよ。ねえ、だからロスケが悪いやつだ、大きらいだと憎んでばかりいるのはいけないんだよ。みんな許し合って仲よくやるんだ、今までの事はよく反省するだけ十分して忘れてしまうんだ。思い切って忘れてしまって、これからのことを一生 県 命 考えるんだよ。」

これは船員が鈴木に話している一節であるが、鈴木は友人や多くの日本人を殺したロシア人だけが悪いのではなく（それは同時に、日本人が大陸で行った様々な行為も同様になる）、「戦争」という行為がもたらした大きな不幸であるという捉え方をしている。したがって最終的には、一応反省はするが今までのことはすべてを忘れ、これからの生活に向かって前向きに生きていこう、という結論になってしまう。被害者意識もなければ加害者意識もない。これに対して、鈴木は納得できない。なぜなら、鈴木は家族や知人が直接、間接にロシア人に殺されるのを見ているし体験している。「いっぱいの人を殺したロスケを許してやるの。どうして許してやらなければならないの。」と食い下がる。それに対して船員は「ロシアの兵隊さんだって人間だよ。わかる？ 誰だって殺し合いなんかしたくないだろう。でもほんの出来心でおこした「戦争」がロシアの兵隊さんをあのようにさせたのだ。」と述べるのである。船員は「みんながおたがいに許し合う気持ちをもって、あたたかくおつきあいをしたら」平和な世界が出来上がるという信念を持っている。ロシア兵が悪いのでもなく、日本兵が悪いのでもなく、「戦争」という行為が非人間的な行為に走らせてしまったのだと考えるのである。しかし当時の鈴木にとって「にくいにくいロシア人を許してやること」はできない。「もしロシア人と満人が私たちをあんなふうにいじめなければ」兄弟や友達は死ななかったし両親も悲しまなかった、と考えた。船員の数日間に及ぶ説明でやや軟化するが、結局は「ロシア人をにくんでいけないと言われても愛することは出来ない」と書いている。これが当時の鈴木の本心であり、十数年後に「空気さん、あの海を越えて行って」を書いたときの変わらぬ気持ちであったのだろう。さらにその二十余年後に「戦争ってかっこいいもんじゃないんだよ」を公開した時点でも、同じ思いを持ち続けたのである。鈴木にとっての満州引き揚げという戦争体験は、被害者意識以外の何ものでもなかった。そして日本に無事戻ってきたその瞬間、「今までの苦しい事もその時には総て思い出」となってしまったのである。

1、ですでに述べたので重複するが、「戦争ってかっこいいもんじゃないんだよ」発表後の沖縄旅行での異常な体験、広島平和記念資料館の訪問により、鈴木は戦争体験を語り継ぐことに対する使命感を強く持つようになる。さらに学者の話を聞いて、自分史を書くことは、底辺の庶民から郷土史、日本史、世界史、人類史までつながるという理論を習得する。このような背景の下、昭和 55（1980）年に『あの日夕焼け』という子ども向きの本を商業出版する。読者から寄せられた感想の中には批判的なものもあった。すなわち、加害者としての日本人、戦争になった理由の解明が抜けているという批判である。その指摘を受け止め、政治思想史をバックにした近・現代史の学習を始める。その成果が反映した鈴木は文字通りの自分史『満州そして私の無言の旅』を昭和 62（1987）年に出版する。この本は鈴木の前までの作品とは全く違う視点で書かれている。それは、被害者意識から加害者意識への転回である。

わたしはその時まで被害者意識のみ強く、「ソ連兵にやられた。中国人にやられた」としか思っていなかった。

とんでもないことだった。やったのは日本のほうだった。調べていけば、日本兵が

中国人にどんなことをしたのか文献も、写真も出て来る。大変なことをしていたのだ。どう謝罪してもしきれないようなことをしている。

「知らずにいる」ということは恐ろしいことだと思った。もしこの本を書こうと学び始めなかったら、真実を知らずに「自分は被害者だ」とのみ思い、相手をただ憎みながら死んでいったらう。(200—201 頁)

この引用からも分かるように、資料や文献を丹念に調べることにより、今まで自分が抱き続けていた「被害者意識」は誤りであり、実は自分は加害者の一人であったという認識にたどりついている。表現もかなり過激であり、例えば「戦後処理としてやるべきことはたくさんあったはずなのに、耳も目もふさぐようにして、自己本位に生きて来た三十数年間を恥ずかしいと思った。」(201—202 頁)とか「十五年戦争の間の、日本が中国に対してのさまざまな侵略行為を考えると、どんな顔で、姿勢で歩いたらいいんだろう、と胸がしめつけられる。」(234 頁)などという表現も所々に見受けられる。その加害者意識は「わたしにも責任はある。国家を作っている一員であるのだから。そして、あのような戦争を容認し、参加してきたのだから」(250 頁)という戦争責任の自覚にまで至っている。そして、「わたしは、日本が中国を明らかに侵略したと思っている。(中略)これからも事実をしっかりと伝え、再び過ちは繰り返さないようにしたい。そのために努力をしていくつもりだ」(250 頁)と戦争体験の継承に対する決意を述べている。さらに「わたしは戦争を指導してきた巨大な力、歴史を動かしている大きな力を感じとれたように思うのです。その力を、わたしたちはしっかりと見すえ、身構えて対していかなければと思います。」(269 頁)と述べるように、戦争に導いていく危うい動きに対峙していく姿勢を宣言している。

鈴木にとって満州での体験は、何よりもまず悲惨なものであった。しかしそれは、敗戦の経験とその後の学習の機会——政治思想史をバックにした近現代史の学習、天皇制について丸山真男『現代政治の思想と行動』で学習——における思想の導入によって、解釈の仕方に変更が加えられた。満州在住の子ども時代に見聞きした中国人への迫害や自分自身が行った中国人の子どもたちに対する「いたずら」や「いじめ」が経験として呼び起こされ、⁹ それにより解釈主体自体も変容したと考えられる。つまり、鈴木が語る戦争体験は、彼女自らが生きてきた経験と持ち込む思考様式との相互関係によって創り出される影響作用史として考えることができるのではないだろうか。

子供向けの作品である「戦争ってかっこいいもんじゃないんだよ」と『あの日夕焼け』では、女性の戦争被害(ソ連兵や中国兵による強姦、墮胎等)を書くことはできず、その詳細は『満州そして私の無言の旅』で語られている。黒山・大虎山周辺で起こった女性が受けた被害についての証言も、12 証言がこの本の中で明らかにされている。女性の戦争被害への強い問題意識が、第 18 回北九州市自分史文学賞・大賞受賞作である『わたしの赤ちゃん』につながっていくと考えられる。

4、「まさこ」の最終証言——「女性の戦争被害」

『わたしの赤ちゃん』に関しては、「自分史における虚構」をテーマにすでに分析を行っている。¹⁰ 本稿では、「戦争体験の継承」に焦点を絞って論じたい。

『わたしの赤ちゃん』は、主人公・高橋千代 16 歳から 79 歳までの一代記を三人称で書いた「聞き書きによる自分史」の形をとっている。満州での終戦後ソ連軍に追われ、千代は大虎山収容所での生活を余儀なくされる。そこでソ連兵や中国兵に強姦され妊娠してしまう。収容所から脱出し錦州へ、そして引き揚げ船で博多に上陸する。「女性だけの身体検査」を受け、「厚生省博多引揚援護局保養所（二日市保養所）」で胎児（7 ヶ月）を処理する。この作品はそのような体験を持つ女性の一代記なのであるが、実はこの自分史は 3 人の人生を合体して作られている。主要な部分で言えば、収容所で強姦され墮胎するところまでは千代（仮名であるが実在の人物）の自分史であり、その後は鈴木政子自身の自分史である。つまり、『わたしの赤ちゃん』の主人公である高橋千代は、創作された人物なのである。このような作品を自分史と呼ぶことができるか、という問題は本稿の趣旨とは外れるので、ここではひとまず棚上げにしたい。¹¹

『わたしの赤ちゃん』のモチーフは「戦争体験の継承」、特に今まで闇に葬り去られていた「女性たちの悲惨な戦争体験」を書き残すことにある。

前述したが、鈴木は『満州そして私の無言の旅』で初めて「女性の戦争被害」に言及した。まだ 10 歳の子供であった大虎山収容所時代（昭和 20（1945）年から昭和 21（1946）年）に、その意味することは分からなかったが、「夫と子どものいる収容所のまんなかで、いやがる女性を引きずり出し犯すソ連兵たちのこと。昼夜を問わず、引き出される悲鳴を聞いていたこと。」¹² は記憶にしっかりと刻まれていた。その原体験が、四十数年後に鈴木に女性の戦争被害を書かせることになったのである。

鈴木政子自身、「この事実は、若い人たちにもしっかりと伝えることが、生かされた私の役割」¹³ であると述べている。「女性の戦争被害」の事実を後世に伝えなければならない、という著者の「戦争体験の継承」への強固な意志が表れている。「女性の戦争被害」は多くの場合、当事者の口からは語られない。第三者の証言、あるいは聞き書きとして公になっていく。しかしそれすら、関係者にとっては苦痛を伴う場合が多い。鈴木は、同じように引き揚げてきた先輩に「ひとりの母親が子を産む。またその子が次の世代の子を産み、次代はつながっていく。そのつながりをよりよく続けるためにも、このこと（女性の戦争被害 — 筆者註）は伏せておいたほうがいいよ」¹⁴ という助言を受けている。これに対して鈴木は、「分かります」と述べつつも次のように続ける。

四万人もの被害者が六十余年すぎた現在も、戦後をかかえて生きておられることを考えたのです。また、戦いに負けた国の女性は、いつの時代にもこうして虐げられていなければならないのか、とも思ったのです。¹⁵

鈴木はここに至って、満州引き揚げ体験の枠を越え、「いつの時代」でも「戦いに負けた国の女性」は「虐げられていなければならない」という「女性に対する戦争被害」の普遍性を認識したのである。この引用文に続く「この事実は、若い人たちにもしっかりと伝えることが、生かされた私の役割ではないか、と決心したのです。」¹⁶ という一節から、鈴木の戦争体験継承への強い使命感を読み取ることができる。鈴木が事実を次代に伝える手段として選んだのは、自分史という表現方法だったのである。

おわりに

本稿では、子どもの頃満州で悲惨な戦争体験をした鈴木政子が、戦争体験の継承をライフワークとして活動するに至ったプロセスを明らかにした。戦争体験は、「思い出したくない過去の出来事」から「現在の問題」へと変化し、生きている戦争体験者として、次代に伝える義務があるという認識に至っている。また作品を書くことにより、戦争の被害者・知らぬ間の加担者という受け身の姿勢を否定し、自分にも戦争の責任があるという加害者としての認識を獲得している。これらの変化は、一つの作品を書き上げるために文献等を調べるという学習の成果によるところが大きい。書き上げた作品の不完全さを補うためにさらなる学習をし、次の作品を書き上げていく過程で、より強固な思想が形成されていくと考えられる。

鈴木が満州引き揚げ体験を書いている時期は主に1970年代後半から1980年代にかけてである。先行研究で明らかなように、この年代は庶民の戦争体験の記録化が大きく進んだ時期である。またベトナム戦争で日本がアメリカに追随する姿勢を取ったことに対する批判が、戦争認識を変化させた（加害者意識の芽生え）。さらに昭和47（1972）年の日中国交回復も日本の戦争責任を問い直す契機となっている。¹⁷ このような社会における戦争の捉え方の変化が鈴木に与えた影響も、無視できないであろう。¹⁸

鈴木の場合、「ふだん記」との出会いがその後の活動の出発点となっている。自らが創設に関わった「ふだんぎ茅ヶ崎グループ」時代こそが鈴木の自分史における青年期である。

『ちがさきふだんぎ』に掲載された鈴木作品を読めば、その時期の揺れ動く心が読み取れる。この時代を経たからこそ、鈴木はライフワークとしての戦争体験の継承を決意することができたのだ。そして「まさこ」の最終証言です」という題名が示すとおり、鈴木は戦争体験の集大成として、『わたしの赤ちゃん』を世に問うたのである。「ソ連兵や中国兵による強姦」という事実は、当事者自らは語れない。当時子どもであったとはいえ、目前でその行為は行われたのである。鈴木には「強烈な思い」となって脳裏から消えることはなかった。輪姦されたが故に父親が誰かわからない子どもを身ごもった女性たちは、日本に上陸したとき、墮胎罪が成立している中で、秘密裏に墮胎したり産まれた子の口をふさいだりした。そのような悲惨な過去を引きずりながら生きてきた女性たちの代わりに、鈴木は『わたしの赤ちゃん』を書いたのである。¹⁹

しかし、女性への性犯罪はソ連兵だけではない。鈴木が集めた証言を見れば明かなように、「暴徒と化した軍民」「満人巡査と暴民」も女性を強姦している。²⁰ 大虎山収容所では、「ソ連兵の後に中国兵も加わ」って輪姦が行われている。²¹ それにも関わらず、鈴木はソ連兵に対しては厳しい視線を向けているが、中国人に対しては不問の姿勢を取っている。中国に対する日本の侵略行為への強い反省の気持ちがそうさせたのであろうか。「わたしたちが大虎山収容所に2ヶ月も置かれた最大の理由は、若い女性をソ連兵が手放したくなかったことにある、と言われている。」²² と鈴木は書いている。大虎山収容所での女性に対する暴行は、証言から見ても、ソ連兵が中心であると考えられる。しかし鈴木最初の作品「戦争ってかっこいいものではないんだよ」の中で「ロシア人をにくんでいけないと言われても愛することは出来ない」とはっきり書いている。引き揚げ時のロシア兵に対する憎しみの気持ちは、60年以上の歳月を経ても、学習を積み重ねていっても、消える

ことはなかったのである。これを鈴木の限界と捉えるのではなく、理屈では割り切れない人間の感情をつづるという行為そのものに、自分史の価値を見いだしたい。

自分史の中で戦争体験は一つのモチーフに過ぎない。自分史は、著者の年代や関心事によって様々な内容があり、書き方も決まりがあるわけではない。しかしどのような作品であろうと、一冊一冊の自分史の中には、個々人の掛け替えのない体験や思いが描かれている。しかし残念ながら、研究対象として自分史が扱われることは少ない。自分史というジャンルの確立が急がれる。

(日本文化学)

【注】

- ¹ 「「まさこ」の最終証言です」(2009・5・10 記)
平成 22 (2010) 年 2 月 11 日、鈴木氏への聞き取り調査を行った。そのときに、鈴木氏よりこの原稿のコピーを頂戴した。
- ² 自分史の概略は、色川大吉『自分史 その理念と試み』(講談社学術文庫、1992 年)、同『ある昭和史 自分史の試み』(中央公論新書、1975 年)、橋本義夫『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』(講談社現代新書、昭和 53 年)、吉澤輝夫編集『現代のエスプリ 自分史』(至文堂、1995 年)を参考文献として筆者がまとめた。
- ³ 昭和 52 (1977) 年 9 月 28 日、ふだん記茅ヶ崎グループを発足。同年 12 月 1 日、『茅ヶ崎ふだんぎ』創刊号を発行する。鈴木たちが作った茅ヶ崎のふだん記グループの名前を、鈴木自身、本によって違った呼び名で書いている。『満州そして私の無言の旅』では「ふだんぎ茅ヶ崎グループ」、「ふだん記」運動からの出発——自分史教室からのレポート」(『現代のエスプリ 自分史』)では「茅ヶ崎ふだん記グループ」となっている。本稿では、グループ誌に書いてある「ふだん記茅ヶ崎グループ」に統一した。
- ⁴ 鈴木は橋本義夫への思いは「「ふだん記」運動からの出発——自分史教室からのレポート」(『現代のエスプリ 自分史』) 84 頁による。
- ⁵ 鈴木のプロフィール及び自分史を書くに至る経緯は、鈴木の文字通りの自分史である『満州そして私の無言の旅』に依拠している。
- ⁶ 「「まさこ」の最終証言です」(2009・5・10 記)
- ⁷ 『満州そして私の無言の旅』197 頁
- ⁸ 「戦争ってかっこいいものではないんだよ」(『ちがさきふだんぎ』第 2 号) 45 頁
- ⁹ 鈴木は中国人の子どもたちが遊んでいる遊具を取り上げたり、やっと作りあげた砂の陣地をこわしたり、ちょっとしたことで殴るなどのいたずらを平気でやった。なぜそのようなことを子どもの頃やったのかという理由を、「わたしたちは中国人より偉いんだ。優秀なんだ」という思い込みが、こんな「いたずら」や「いじめ」をさせるのだった。」と述べている。『満州そして私の無言の旅』30 頁
- ¹⁰ 「自分史における「虚構」——鈴木政子『わたしの赤ちゃん』を中心に——」(『JunCture 超域的日本文化研究 04』、名古屋大学大学院文学研究科附属日本近現代文化研究センター、2013 年、102—112 頁)
- ¹¹ 『わたしの赤ちゃん』と鈴木の自分史である『満州そして私の無言の旅』との比較分析はすでに行い、『わたしの赤ちゃん』が 3 人の人物を合体した作品であることは他の論文で証明済みである。このような虚構性の強い作品を自分史と呼ぶことができるかという問題であるが、私自身は自分史の臨界を越えた作品と位置づけている。すなわち、一般に考えられている自分史の範囲を逸脱した、小説の域に足を踏み入れた作品と言わざるを得ないと思う。鈴木は「この本に書かれていることはすべて事実です。嘘はありません」と断言するが、たとえ一つ一つの事柄が事実であっても、3 人の人物を合体させて 1 人の人物を創作した段階で、この作品は自分史の範囲を大きく逸脱している。なぜなら、この物語の主人公・高橋千代は、実在しないからである。(「自分史における戦争体験の語り——鈴木政子の作品分析——」未発表)
- ¹² 『わたしの赤ちゃん』167 頁
- ¹³ 同 168 頁
- ¹⁴ 同 167 頁
- ¹⁵ 同 167—168 頁
- ¹⁶ 同 186 頁

- ¹⁷ 吉田裕『日本人の戦争観』（岩波書店、1995年）、
成田龍一『「戦争経験」の戦後史——語られた体験／証言／記憶』（岩波書店、2010年）
- ¹⁸ 『満州そして私の無言の旅』の「あとがき」に
ベトナム戦争の映像がテレビで放映された時でした。砲弾の中を幼い弟を抱き、やせた身体で必死に逃げる少女の姿を見ました。私は、一瞬顔をそむけてしまいました。あまりにも当時のわたしに似ていたからです。（269—270頁）
と、ベトナム戦争の記述が出てくる。また、昭和56（1981）年3月、第1次中国残留孤児来日時に、宿舎に行って残留孤児と面会している。昭和61（1986）年9月の第12次中国残留孤児来日時には、歓迎会に出席している。
『わたしの赤ちゃん』109—113頁、『満州そして私の無言の旅』7—12頁
- ¹⁹ 「「まさこ」の最終証言です」（2009・5・10記）の中で、鈴木は次のように書いている。
「だから、わたしが代わりに書いたのです」と叫びたい！
- ²⁰ 『満州そして私の無言の旅』84—85頁
- ²¹ 『わたしの赤ちゃん』41頁
- ²² 『満州そして私の無言の旅』90頁

【参考文献・資料】

- 色川大吉『ある昭和史 自分史の試み』（中央公論新書、1975年）
色川大吉『自分史 その理念と試み』（講談社学術文庫、1992年）
吉澤輝夫編『現代のエスプリ 自分史』（至文堂、1995年）
橋本義夫『だれもが書ける文章 「自分史」のすすめ』（講談社現代新書、昭和53年）
吉田裕『日本人の戦争観』（岩波書店、1995年）
成田龍一『「戦争経験」の戦後史——語られた体験／証言／記憶』（岩波書店、2010年）
有山輝雄「問題提起 戦後日本における歴史・記憶・メディア」
（『メディア史研究』第14号、メディア史研究会編、2003年）
ロバート・N・ベラー他『心の習慣 アメリカ個人主義のゆくえ』（みすず書房、1991年）
『ちがさきふだんぎ』第1—30号（1977—1990年）
鈴木政子『あの日夕焼け——母さんの太平洋戦争——』（彩図社、平成12年）
鈴木政子『満州そして私の無言の旅』（立風書房、1987年）
鈴木政子『「舎監せんせい」——集団就職の子どもたちと共に——』（新風舎、2000年）
鈴木政子『わたしの赤ちゃん』（学習研究社、2008年）
第1回から第18回までの北九州市自分史文学賞選評（学習研究社、1991—2008年）
「「まさこ」の最終証言です」（2009・5・10記）
『日本史シンポジウム「自分史の明日をさぐる」』報告書（平成11（1999）年）

【論文の要旨】

自分史を書く人は、60歳代、70歳代中心の高齢者層に多く、幼少期から青年期にかけて戦争を体験している人も少なくない。それゆえ自分史を考える際、戦争体験を避けては通れない。本稿では、自分史作家・鈴木政子の作品を分析することにより、自分史における「戦争体験の継承」についての考察を試みた。

鈴木政子は満州からの引揚者の一人で、子どもの頃に戦争を体験している。自分史を書く過程で、鈴木政子の戦争体験に対する考え方は「思い出したくない過去の出来事」から「現在の問題」へと変化した。生きている戦争体験者として自分の体験を次代に伝える義務がある、という認識に至る。また自分にも戦争の責任があるという加害者意識も芽生える。さらに鈴木は満州の収容所で行われた「ソ連兵や中国兵による強姦」という事実を明らかにする。悲惨な過去を引きずりながら生きてきた女性たちの代わりに書かれた『わたしの赤ちゃん』は、同時に鈴木政子の自分史の集大成でもあった。

【欧文タイトル】

The Person Who Experienced War Does Not Have a Postwar Life

— An examination of the succession to the war experience found in many autobiographies —